



Canadian Broadcasting Corporation

こうした実験をやめないでしよう。」
自らの人生経験からすると、スズキには全ての人が正しく行動するものとは考えられないのである。スズキの一家は彼が五つの時、プリティッシュ・コロンビア州スローカンに送られた。西海岸の日本人を収容する収容所であった。彼は孤独な、きびしい人間に成長した。そして奨学金をもらってアマースト大学で学ぶようになってから、遺伝学のとりこになった。「まったくすばらしかった。最

高に厳密かつ論理的で」と彼はあとで述べている。

シカゴ大学で博士号を取った後、テネシー州のオーク・リッジ国立研究所に採用された。そこではちょうど市民権運動が始まったばかりであった。彼は全身全霊をあげてその渦中にとびこんだ。カナダへ帰るとまずアルバータ大学に、ついでプリティッシュ・コロンビア大学に移った。一九六七年に彼と五人の研究員たちは一つの論文を発表する。「キイロシヨウジヨウバエI型における温度感覚の変異——ガンマ線および化学誘導による伴性劣性致死因子および半致死因子間の相関度数」がそれである。これは害虫制御に関する画期的な研究であった。もともと論文のタイトルは、スズキには虫の好かない専門用語の羅列ではあったが。

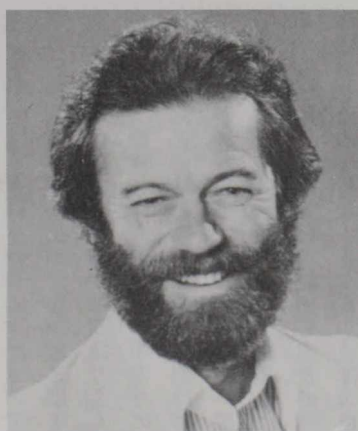
「科学的な活動や用語を神秘化すれば秘密を作ってしまう。こうして秘密主義がはびこってしまうのです。それをなくすることならいくらでもできますよ。」
というわけで、彼はエドモントンとバンクーバーのテレビとラジオ番組に出始めた。それからCBCが「スズキ科学を語る」というささやかな全国向けのショー番組を提供した。「サイエンス・マガジン」は四年前放映を開始したが、たちまち水曜の夜八時というゴールデン・アワー番組に成長した。
一九七七年の秋にはスズキはプリティッシュ・コロンビア大学と果実バエのものに帰っていった。

俳優・劇作家・作曲家

ゴードン・ピンセント

「無法者」ゴードン・ピンセントは俳優であり、劇作家であり、小説家であり、作曲家でもある。

彼の収入は六桁まで飛び上がって、そこで急にストップした。そのつもりならもつと稼げただろう。



Canadian Broadcasting Corporation

「今までの五年間に、そうだな、二十万ドルくらいのテレビ・コマースの仕事を断わってきたかな。やりたくなかったんだ。一つにはただのタレントになりきっちゃうのがいやだった。物を書くのは性に合ってる。作家は俳優よりずっと頭を使うからね。タレントの頭なんてからっぽさ。」

むろんゴードンの方はビッシリ詰まっている。彼はニューファンドランドのグランド・フォールズ生まれで、若い頃にはバナラ・エクスから液体靴みがき剤にいたるまで、ありとあらゆるとんでもな

いものを飲みまくった。一九五九年にトロントの古いクレスト劇場の端役と、ストラットフォード・シエークスシア祝祭劇場でもちよい役をもらってやっと落ち着くことになった。六〇年代の中頃にはムーズ・フォールズ出身の気取り屋議員の物語「クウェンティン・タージャンス議員」の役をもらって一躍テレビの名士となる。

一九六九年ハリウッドへ移って六年間いた。いろいろやってみたがスターにはなれなかった。一九七〇年に「無法者」を思いつき、苦勞したあげく、トロントで映画化に必要な金を出させることに成功した。

映画では彼があのだらしない陽気なニューフィー（ニューファンドランド人）の無法者ウイル・コールの役をやっている。この作品は興行成績はそれほどでもなかったが識者には認められた。そしてこの作品の本質的な部分はその後の彼の創作活動の焦点となったのである。

この作品を彼はおよそ考えられる限りの演劇形式で書き直して使っている。

「いい作品だが、もつとよくなるはずだった」——マクリン誌上で彼はこう語っている。「あとほんの少しばかり慎重さと時間ともつとたくさんの予算があればよかったんだ。あれは単なるストーリーじゃない。おれの人生そのものなんだ。だからもつと完璧なものにするために本にしたんだ。」

本はうまくいった。そこで彼はのちにこれをミュージカルにして、シャーロット